就夫、翁何方ニ相果候とも、「新式」ハ私方へ参候筈ニて、則焼失。然者、伝へ申事、誰様ニも不仕候

とあり、芭蕉と杉風との間に、贈与の約束があったものと思われるが、元禄十五年までには焼失していたことが知られる。

⑮ 支考「本朝文選」の「陳情ノ表」所収。

⑯ 落柿舎は、貞享ごろ、其角が隠棲のため手に入れたもの。従って「落柿舎のぬし」は其角を指す。

⑰ 『総釈　去来の俳論(下)、去来抄』(南信一、昭和50・5・31刊) p91。

⑱ 「金蘭集」所収の歌仙前書に「酉霜月」とあり、元禄六年十一月の芭蕉作と思われる。

⑲ 「宇陀法師」(元禄十五年〈?〉刊。李由・許六編)に「はれ物にさはる柳と自筆の短尺に有」としている。

⑳ 「梅が香に」の句は元禄七年、「なまぐさし」の句は、元禄五年若しくは六年の作とみられる。

㉑ 元禄五年二月七日付杉風宛芭蕉書簡。

それは、芭蕉が自らめざした蕉門俳諧のある世界を後世に伝承展開することを支考への期待として抱いていたということになろう。

その期待のひとつの表れが、元禄五年の「葛の松原」刊行直前の芭蕉の書簡にみられる逆説的な支考をかばう芭蕉の態度であり、「葛の松原」刊行について、その相談に加わり、書名を自ら命名するという芭蕉の行為にみることができる。また臨終に当たって、辞世句の推敲について意見を求め、百人一首や古今序註の贈与という形で表れたとみることが出来るのである。

＜註＞

① 「削かけの返事」（支考。享保十三年奥）

② 「六月始には深川芭蕉庵の新宅に帰り、葛の松原の相談最中に美濃より飛脚来り」（「削かけの返事」）

③ 本簡は、昭和四十三年二月、山本唯一氏が「連歌俳諧研究」第三十四号に、京都の内藤家所蔵として紹介されたもので、本文三メートル四十七センチにわたる長簡であるという。

④ 菅沼外記宛芭蕉書簡中の支考非難については、『校本芭蕉全集第八巻書簡集』の頭註で今栄蔵氏の、「言葉の表面上の意味だけで解すべきではあるまい」と極めて注意すべき意見がみられ、この文は必ずしも支考非難が本意ではないとも考えられることを示唆されている。

⑤ 「削かけの返事」。越人が支考の「俳諧十論」への駁論として書いた「不猫蛇」（享保十年稿）に対する支考の反論。
支考が門人渡辺ノ狂の変名を用いて著わした。弟子の名に仮托しているので、支考を「我師」と呼び、支考の言動に敬語的表現が用いられている。

⑥ 元禄五年正月二十三日付正秀宛芭蕉書簡に「爰元盤子桃隣一所に越年、打寄〳〵御噂のミ申候。」とある。

⑦ 元禄七年十二月四日付浪化宛去来書簡を日記に記したもの。

⑧ 「あかさうし」所収。

⑨ 「枯尾花」は其角編。元禄七年刊。次に引く部分は同上書の「芭蕉翁終焉記」に所収。

⑩ 「笈日記」によれば「此夜」は十月八日のことである。

⑪ 「笈日記」十月九日の条に、

服用の後支考にむきて此事は去来にもかたりをきけるが、此度嵯峨にてし侍る大井川のほつ句おぼへ侍るかと申されしを、あとに答へて

大井川浪に塵なし夏の月

と吟じ申ければ、その句園女が白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るとて

清瀧や浪にちり込青松葉　翁

とあり、また「三冊子」にも、この句のことに触れて、

清瀧や浪に散り込青松葉

此はじめハ、大井川浪にちりなし夏の月と有。「その女が方にての、白菊のちりにまぎらはし」とて、なしかへられ侍る也

と記している。

⑫ 「此度前」はその後に「後」の一字が脱落したのであろうとする説が有力で、このことは、支考の「十論為弁抄」にも、「此度前働とハ前後の後の字おちてや侍らん」としているところで、「此度前後」とすれば、文章の意図も明瞭であり、「命終の期もちかゝらんには落字こそかへりて殊勝なれ」と支考の言うごとく、臨終近い時期の芭蕉の気力の衰えを感じさせることばとして読みとることが出来る。

⑬ 「芭蕉翁全伝」に
支考此度もとある三行自筆也
とある。

⑭ 元禄十五年七月二十三日付厚為宛杉風書簡に、

芭蕉晩年の句の特徴のひとつは、日常的なことを、平易なことばで表現した、わかりやすい句、さらりと平淡で、難解さのない軽やかな表現にある。

元禄五年ごろから、芭蕉が書簡の中で、自ら取り上げている句を例にあげてみると、

鶯や餅に糞する縁の先

鞍坪に小坊主乗るや大根引

菊の香やならには古き仏たち

といった句に、先に触れたような傾向をみることができる。

「鶯や」の句は、芭蕉自身が、「日比工夫之処ニ而御座候」と書き添えている[21]句で、鶯と梅の連想や、鶯といえばその鳴き声を賞でるといった、旧来の和歌的伝統を脱し、餅に鶯が糞を落とすという、俗的な日常性の中に俳諧的世界を発見したものである。

また「鞍坪に」の句は、繋いである駄馬の鞍に子供が乗せられ、その傍らで両親が大根引きをしているというところに、日常的な素材でわかりやすさのある句である。

「菊の香や」の句には、奈良の伝統的な寺社のたたずまいや、和歌に詠まれた世界を表面に出さず、菊の香のただよう中の「古き仏たち」という平易なことばで、奈良の秋の情感を把えている。

これらは、いずれも、日常的な素材を生かし、それを平明な世界につくり上げた句である。

芭蕉のこうした句風に対して、支考が共感、共鳴をもって近寄っていったことは、芭蕉在世中乃至は芭蕉没後、間もなく刊行された「笈日記」（元禄八年七月十五日自序）の中の作品によってわかる。

その例としては、

桃咲いて石にかどなき山家かな

うね〳〵にながるゝ雨やけしの花

松風をうしろにしさる田うえかな

などの句を挙げることが出来るからである。

説明を加えてみると、「桃咲いて」の句は、周りに桃が咲いている山峡の聚落の家は、屋根の置き石が、どれも角のない丸い川石である、といかにも山家らしい、素朴な情景を素直に表現している。

また「うね〳〵に」の句は、雨中のけしの花が咲いている畑の畝の間に、雨水の流れる様子を、平易なことばで把えたものである。

「松風を」の句は、松を吹く風を背にして、苗を植えながら、順次後じさりする田植えの様子を「うしろにしさる」という、日常的なことばで表現した句である。

こういうことは、芭蕉の句風に近い、日常的な素材、平明なことば、さらりとした表現という特徴を見ることができるということである。

それは、芭蕉が俳諧にめざした「俗談平話を正す」という芭蕉の一面を、日常的なことを、平易なことばでとらえ、わかりやすい句にまとめるという「俗談平話」という形で支考が理解したということであり、芭蕉俳諧の支考的理解による展開が、支考一派の美濃派俳諧の流れにつながっていくわけである。

以上述べて来たように、支考は入門以来芭蕉のめざす俳諧を理解し、芭蕉の理念を作品の上でも実現することに努めて来たということが出来、そうした支考の態度や指向を認めた芭蕉が、支考に期待したものが何であったかを推定することができよう。

の句形の場合は、柳が芽吹いている。細い枝の幾条もしだれている下を通ると、風に揺れたしなやかな柳の枝先が腫物に触れた。その途端、やわらかにしなった細い枝であるのに、腫物に走る痛みを感じた。といった句意になろう。

二つの句形について、「去来抄」に解決上の見解のちがいが示されている。

去来は「直にさハりたる也」と述べ、これは直接に柳の枝先に触れたという句で、「柳のさハる」であると解した。これに対して、支考は、柳のやわらかさを「柳のしなへに腫物のさハる如し」とした比喩の句であるとし、「さハる柳」と理解すべきであるとし、直接触れたのではなく、たとえた句であると発言した。許六、丈草もこれに同調したというのである。

微風にゆれる柳のしなやかさを、腫物にさわるようだとする芭蕉の表現は鋭く、これを比喩の句だとした支考の受けとめ方には、芭蕉の表現力を読みとった妥当な意見である。

このあたりにも、支考が芭蕉の作句態度や作者の真意をよく理解していることが知られ、その意味では、芭蕉のよき理解者であったと見ることが出来るであろう。

「笈日記」に次のような一節がある。

梅が香にのつと日の出る山路哉　　翁

なまぐさし小なぎが上の鮠の腸⑳

梅が香の朝日は余寒なるべし。小なぎの鮠のわたは残暑なるべし。是を一躰の趣意と話し候半と申したれば、阿叟もいとよしとは申されし也。

「梅が香に」の句は、梅の香のただよっている春の朝の山路を行くと、朝日がのっと出て来た、という早春の景を詠っている。

「なまぐさし」の句は、小なぎの葉の上に鮠のはらわたが捨ててある。これが大変生臭い匂いがする、という初秋の句である。

この二句について、支考の受けとめ方をみると、「梅が香に」の句については、春を迎えた感じを把えた句であるけれども、梅の香と早春の朝日との取り合わせを通して、早春になお感じられる寒さの趣を持つことを理解したのである。

また「なまぐさし」の句では、水葱の細葉の上に捨てられた鮠のはらわたの生臭い腐臭を通して、秋になってもなお感じる、きびしい残暑を読みとり、この二句の間には「一躰の趣」があるとしたわけである。

ここでいう「一躰の趣」とは、「梅」（早春）と「小なぎ」（初秋）という季節のちがい、朝日と鮠のはらわたという素材の相異はあるけれども、両句が共に「余寒」「残暑」という、季節の微妙な推移を余情として感じさせる句であるという点で、支考は新しい俳諧の趣を持つと理解したわけである。

そこに、支考の独自の把握がみられ、その点を芭蕉は「いとよし」と評したのである。

そしてそれは、芭蕉が、支考を芭蕉俳諧の理解者として認めたということになる。

さを讃え、自らの態度を顧みて悔いていることである。ここに支考の俳諧を学ぶ、素直で誠実な態度がみられ、去来も支考のそういう態度を真摯な姿勢として認めているわけである。

また、「三冊子」に

芹焼や縁輪の田井のうす氷⑱

比句、師のいはく「たゞ思ひやりたる句也」となり。芹焼に名所なつかしくおもひ遣りたる成べし。

という一節がある。「たゞ思ひやりたる句也」という芭蕉のことばが出た経緯は、支考の「笈日記」ではこの句の後に註をつけて

芹焼や縁輪の田井の初氷

比句は初芹といふ事をいひのべたるに侍らんとたづねければ、たゞ思ひやりたるほ句なりと、あざむかれにける。かゝるあやまりも多かるべし。

となっている。但し掲出句の下五は「初氷」という形をとっている。「芹焼」は、鳧、雁などの肉に芹、慈姑、麩、蒲鉾、蓮根などを加えて醤油炊きにした鍋料理の一種であるが、この句について支考が、初芹を摘む季節の情感を読み上げた句であろうと芭蕉に問いかけたのに対して、芭蕉は「たゞ思ひやりたる句」であると答えたのである。これを支考は「あざむかれにける」と感じた。この「あざむかれにける」は、たばかる、誹謗するの意ではなく、むしろ予期した答えに反する意外なことばに意表をつかれた驚きを以て聞いたという意味であろう。

従ってこの句は、芹焼の鍋をつつきながら、この根芹を摘んだ山裾の、山をとりまく田には初氷がみられることだろうと、芹の名所の季節の景観に思いを馳せた句であるというのである。

こうした芭蕉のことばを聞いた支考は、芭蕉の思いがけないことばに、「かゝるあやまりも多かるべし」と自らを反省しているのである。これは支考が自分の理解と芭蕉の思いとの落差から、自らの俳諧観や師の考えに思い至らず、理解の浅かったことへの反省であり、芭蕉を尊敬してやまなかった支考の、俳諧修業の態度のひとつをみることが出来よう。

芭蕉の真蹟短冊に

はれ物にさはる柳のしなへ哉

の句がある⑲。この句には異形の句がある。それは、元禄七年（一六九四）正月二十九日付去来宛の芭蕉書簡の末尾に、

腫物に柳のさハるしなへ哉

と添書きされているものである。

はれ物にさはる柳のしなへ哉

という句形の場合は、芽吹き始めた柳の細い枝にかすかな風が吹いている。そして微風にそよいでいる。それは注意深く、そっと腫物にでもさわるような、しなやかでやさしいしなり具合である。といった句になる。

また

腫物に柳のさハるしなへ哉

「去来抄」の一節に次のような文章がある。

つたの葉　　尾張の句

比ほ句は忘れたり。つたの葉の谷風に一すじ峰迄裏吹かへさるゝと云句なるよし。

予、先師に比句を語る。先師曰く、「ほくハかくの如く、くま〳〵迄謂つくす物にあらず」ト也。支考傍に聞て大いに感驚し「初てほ句トいふ物をしり侍る」と、この比物語り有り。予は其時もなほざりに聞なしけるにや。あとかたもなくうち忘れ侍る。いと本意なし。

この一節は支考から、元禄三年（一六九〇）近江膳所の菅沼曲翠亭での出来事の回想談を聞き、去来が追憶を語っているのであるが、この出来事については、支考自身も同様のことを次のように述べている。[15]

ある夜曲翠亭にあそぶ事ありて、尾の荷兮が、葛の葉の一句を評して、「俳諧はかくいひつくすまじきを」と申されしに、さはとむつかしき夢のさめたる心地せらる。落柿舎のぬし、[16]洒落堂のあるじも、おなじ夜のあそびに侍りて、「我はかくおぼゆるを」といへば、「人はさもおもはず」とこそ。あざむかるれ。よしや我心のせまりたらん時は、焼火の転寝に、雪折し竹をきゝ、戸の節穴に稲妻を見ても、我はかくまどひたりと、おもひしらんに、我はやすき所をしれりと、今宵はじめてぞさだめける。

この時の尾張の句は、「谷風に一すじ峰まで裏吹かへさるゝ」といった内容の句ではなく、「曠野後集」に入集した

葛の葉は残らず風の動哉　　荷兮

を指すとされている。[17]

内容は、この句について芭蕉の

ほくハかくの如くくま〳〵迄謂つくす物にあらず

という言葉によって、発句のあるべき姿は、ことばを押さえて八分にとどめ、すべてをくまぐままで言い尽くすものではなく、余情を感じさせる表現をすべきであると、芭蕉に教えられたことに対して、支考は、きわめて素直に「初てほ句トいふ物をしり侍る」と感動的に受けとめているわけである。

支考自身のことば、「さはとむつかしき夢のさめたる心地ぞせらる」というのも、表現は異なるが、「夢のさめたる心地」というのは、芭蕉のことばで発句のあり方をはっと悟った点では同じ内容の文章とみることが出来る。

今一つの問題として、去来がこの支考の回想を聞いて、「いと本意なし」と残念がっていることである。支考が芭蕉の教えをあざやかに記憶しているのに、去来は、

予ハ其時もなほざりに聞なしけるにや、あとかたもなくうち忘れ侍る

と、「あとかたもなくうち忘れ」たのは、自分がその時「なほざりに聞きなし」ていたのであろうと、支考の師説を受け容れる態度の真剣

では「枯野を廻るゆめ心」と、芭蕉が推敲しようとしたことばに、多少の異同はみられるものの、支考に推敲の可否について相談したことは事実であろう。それに対して支考は上五が初案のままでは

旅に病でなをかけ廻る夢心

となって、季を失うことから、「五文字はいかに承り候半」と聞こうとしたわけであろう。

しかし病臥の身の苦しさを思い、「此句なにゝかおとり候半」と答えるにとどめたのである。支考にとっては、上五に芭蕉がどんなことばを置こうとしたのか、ついに知る機会を失って、「今はほいなし」と悔む結果になったわけである。

また翌九日には、かつて元禄七年夏、嵯峨の落柿舎滞在中の吟、

大井川浪にちりなし夏の月

の句は、九月二十七日、園女亭に招かれて吟じた

白菊の目に立てて見る塵もなし

という句に紛らわしいとして、「是もなき跡の妄執とおもへばなしかへ侍る」と、

清滝や浪に散り込む青松葉

に改作する旨支考に語っている。[11]

多くの弟子たちが芭蕉の看病に参集していたわけであるが、その中で、特に支考を指名し、支考に句の改案について意見を求め、改作を伝えたということは、芭蕉が、支考を俳諧作者として、あるいは芭蕉俳論の理解者として評価していたことの表れと見ることが出来よう。

また病床に在った芭蕉は、遺書三通を支考に代筆させている。そしてその一通に

一、百人一首・古今序註　抜書、是は支考へ可被遣候

一、杉風方に前〻よりの発句文章の覚書可有之候。支考校之、文章可被引直候。何も草稿にて御座候

という記述がある。また他の一通には、芭蕉自筆で

支考此度前働驚、深切実を被尽候。比段頼存候。庵の仏ハ則出家之事ニ候へバ遣候[12]

と書き加えている。[13]遺品贈与のことは「新式」[14]を杉風に与えたこと、及び支考への「百人一首・古今序註」の贈与以外には、遺品の所在を記しているだけである。また、杉風方に残してある草稿類は、支考にその校合を依頼しているわけである。芭蕉が支考に草稿の校合「引直」を期待していることや、「古今序註」などを支考に与えたことは、先に触れた辞世吟の推敲に意見を求めたことと同様に、支考を発句や俳論の理解者として認め、後事を託すのにふさわしい人物として、多くの弟子たちの間で、支考を評価していたことを示すもので、そこに芭蕉から支考への文学的血脈の継承という意味があるのである。また「百人一首」にしても「仏像」にしても、それらの遺品を特に支考に与えたことは、少くとも芭蕉が支考に対して格別の親近感を抱いていたということであり、遺書の一通にわざわざ「深切実を被尽候」「比段頼存候」と、芭蕉が自ら加筆しているのも、そうした芭蕉の支考への人間的信頼の表れを読みとることが出来よう。

にて、旅に病ンでの発句を書せ候ぬ

とある。これは、十月八日八ツ、即ち九日午前二時ごろ、看病中の呑舟に硯・墨・筆の準備をさせ、芭蕉辞世の吟であるとされる、

病中吟
旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

の一句を書きとどめさせたことを報じたものである。

この句については、「三冊子」[8]に次のような叙述がある。

旅に病で夢は枯野をかけ廻
比句、病中の吟にて句の終り也。「『猶かけ廻る夢心』といふ句作有。いかにおもひ侍るや」と人々にもいひて、後、此句に定ると也。枯尾花[9]に其角が書る「『枯野を廻る夢心ともせばや』といへる」と有。笈日記に「猶かけ廻る」と有。

この事については、別に「枯尾花」では

たゞ壁をへだてゝ、命運を祈る声の耳に入けるにや。心弱きゆめさめたるはとて
旅に病で夢は枯野をかけ廻る
また枯野を廻るゆめ心、ともせばやと申されしが、是さへ妄執ながら、風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也、と悔まれし。八日の夜の吟也。

となっている。

「三冊子」の筆者服部土芳は、芭蕉臨終の席にいなかったわけであるし、其角が病床に泉州から駆けつけたのは、先の「浪化日記」からも知られるように、「十一日の夜参着」し、かろうじて芭蕉と生前の対面を果たしたのであり、「三冊子」も「枯尾花」も誰からか伝聞したことを記録したものである。

この句にまつわることとして、支考の「笈日記」に詳しい記述がある。引用すると、

比夜[10]深更におよびて介抱に侍りける呑舟をめされて硯の音のから〳〵と聞へ(ママ)ければいかなる消息にやとおもふに
病中吟
旅に病て夢は枯野をかけ廻る　翁
その後支考をめして「なを(ママ)かけ廻る夢心といふ句つくりあり。いずれをかと申されしに、その五文字はいかに承り候半と申は、いとむつかしき事に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候半と答へける也。いかなる不思議の五文字か侍らん。今はほいなし。

とある。

「笈日記」のこの
なを(ママ)かけ廻る夢心
という芭蕉の改稿案は、「三冊子」では「猶かけ廻る夢心」、「枯尾花」

我師と祖翁との対面は元禄三年三月桃の日也。木曽塚の無名庵にて丈草、乙州と同道也。〈略〉かくて四月の中頃より祖翁へ随伴せられ、幻住庵の山居の間も薪水の労は我師一人なり。

と述べている。[5] 入門を元禄三年三日三日とするなど、若干調子のよすぎる点は感じるものの、その時期が元禄三年春であることは事実と認めてよいであろう。そして芭蕉はこの年多少の出庵の時期を含めて、四月六日から七月二十三日まで幻住庵での生活を過ごしたのであるが、支考はその間に芭蕉庵住の薪水の労を助けた時期もあった。

元禄四年になると、芭蕉は九月二十八日無名庵を出て、桃隣を伴い最後の江戸下向の途に着く。

支考は芭蕉に遅れて近江を出発、十月中旬熱田で芭蕉に合流し、旅を共にして、三河新城の太田白雪亭に泊るなどして十月二十九日に江戸到着、元禄五年の新春を芭蕉、桃隣と共に迎えたのである。[6] そしてこの元禄五年二月中旬には、奥州へ旅立ち、六月上旬、深川の芭蕉庵に帰って「葛の松原」の相談をしているわけである。

この後の二年あまりの資料は空白であるが、元禄七年になると、六月三日付、同二十四日付の杉風宛芭蕉書簡に支考の消息がみられ、八月二十日付の露川宛と推定される芭蕉書簡では、

拙者盆より旧里ニ逗留罷有、伊勢より支考が来るを待居申候

とあって、直接芭蕉と対面する機会はなかったようであるが、かなり頻繁に書簡の往来があった模様を知ることができる。

そして元禄七年八月末、支考が伊勢から伊賀を訪れるのを待って芭蕉は大坂に向かって旅立つことになるわけである。

九月八日、伊賀を発った芭蕉・支考・次郎兵衛・又右衛門らの一行は、重陽の節句を奈良で過ごし、九月九日夜には大坂に到着している。

その後、大坂で芭蕉は発病するのであるが、支考は次郎兵衛らと共に、同門の弟子たちへの連絡と病気快癒の祈願などを初め、誠意をもって芭蕉の看病にあたる。

その誠実で献身的な態度は、芭蕉の期待と信頼に十分こたえるものであった。芭蕉にとっては支考の献身ぶりは予想以上のものであり、かつて書簡の中で、表面では支考非難の体裁をとりながら周辺の先輩たちの敵意を和らげようと意図した芭蕉の信頼にこたえる行動をとっていたということになろう。

九月十日夕刻から寒気、頭痛に襲われた芭蕉は、以来病気不快を繰り返し、九月末からの病状悪化に伴い、十月五日には大坂久太郎町御堂ノ前、花屋仁右衛門の貸座敷に病床を移し、門人たちの看護を受けることになる。

先の同行者支考・惟然らや、知らせによって駆けつけた正秀・去来・乙州・丈草・李由らの手厚い看護も効果なく、十月十二日申の刻（午後四時）芭蕉は旅の途中で死去するのである。

「浪化日記」[7] に

十月七日に去来正秀大坂へ下り介保（ママ）、追々木節、乙州、李由、臥高、探志、昌房等参訪ス。其角も従泉州十一日ノ夜参着。生前の対面を遂候。翁病中にもたゞ風雅之他なし。同八日之八ツに病中の唫の由

史邦へもひそかに御伝、さたなき様に御覚悟可被成候。

これは、元禄五年五月七日付去来宛芭蕉書簡③であるが、本簡で芭蕉が言っているのは、

・支考は役に立つ男ではない。
・其角初め連衆が悪んでいる。
・酒さえ飲めば馬鹿踊りをする。
・訪ねられる覚悟をしておいた方がよい。
・史邦にも内々その旨伝えられたい。

といったことが中心となっている。

他の一通は、同年九月十七日付の菅沼外記宛芭蕉書簡である。これには、

昨夜五ッ前上方咄、盤子が愛敬なき顔つきも二度見るやうにうるさく…

という一節が見られる。これも表面的なことばとしては、支考の噂を聞くだけで、愛敬のない顔つきを二度見るようで、想像しただけでうるさく感じられるというのであろう。

こうした芭蕉書簡が認められた直後、支考の「葛の松原」が刊行されるわけであるが、先の書簡にみられるような支考批判が、芭蕉の本心であったとするならば、他の古参の弟子にもみられない俳論書の刊行を、支考に認めたことは、理解しがたいと言わねばならないことになる。

こう考えると先の二通の書簡にみられた、芭蕉の支考批判を、文字通り受けとめては、書簡と「葛の松原」出版容認との間に矛盾が生じてくる。その意味で両簡とも、額面通り支考批判が芭蕉の真意であったと受けとめることに、いささかの疑問を感じるものである。④

確かに支考は、蕉門の中で、きわだった才能の持ち主であったであろうし、弱年のころ僧籍にあったことも、漢籍や仏典について、他の弟子たちより豊かな知識を持っていたと考えられる。

しかし、支考が知識や才能を発揮すればするほど、芭蕉東下直後からの其角を初めとする古参の弟子たちとの間に、反発や反感が生じたであろうことは容易に想像できることである。

先輩俳人の中には、支考の俳論の確かさを認めつつも、その活発な言動に反感が広がっていて、芭蕉はそれを非難する形で支考をかばい、先輩俳人の敵意を和らいでおこうとする意図があったと見ることはできないであろうか。また芭蕉書簡にみられることばからも、徹底した正面からの支考批判というよりは、むしろ先輩俳人の支考批判のことばを肯定し、それを認めるという、むしろ俳諧的な逆説の中で、先輩俳人の支考非難をかわそうとしたのであって、芭蕉の真意は支考批判そのものにあったのではなかったと考えたい。

先輩俳人を含めて蕉門の弟子たちが、或る面では支考の才能の豊かさや芭蕉の信頼を認めていたと考えるなら、芭蕉没後、十月十八日、義仲寺での初七日追善俳諧で、其角の発句に支考が脇句を付けたことも理解できることであろう。

ここで芭蕉と支考の関わりを、詳しくふりかえってみたい。

支考は、先に触れた芭蕉入門とその年の出来ごとを回想して、

支考の芭蕉受容

小瀬渺美

Acceptance of Bashō by Shikō

Hiromi Kose

It is easy to see that Bashō felt strong intimacy to Shikō and had deep trust in him from the fact that Bashō had asked Shikō for his opinion with regard to *hokku* to be composed at his deathbed and that Bashō had left a note concerning Shikō in his will.

The purpose of this study is to discuss and factually prove that the reason for Bashō's attitude above was that Shikō was able to understand clearly and hence accepted faithfully Bashō's idea on *haikai* in developing his own *hokku* and view on *haikai*.

Received April 30, 1986

各務支考は、俳論書「葛の松原」を刊行している。この書は芭蕉生前に出された唯一の俳論書で、他の弟子に同種の書のないところから、芭蕉の信頼が厚かったと見ることが出来よう。

年次を辿って、芭蕉と支考の関係を見ると、支考が芭蕉を最初に訪ねたのが、元禄三年（一六九〇）で、その直後に、幻住庵で薪水の労をとったと支考は言っている。[1]

翌、元禄四年（一六九一）には、尾張で芭蕉と落ち合って、江戸深川の芭蕉庵で過ごし、元禄五年の新春もここで迎える。

支考は芭蕉憧憬から、元禄五年二月中旬から、奥の細道の跡を逆に辿り、江戸に帰りついている。「葛の松原」刊行の打ち合わせなどもあったらしく、[2]同書の刊行はこの年の秋である。

その後、芭蕉が没するまでの二年間、即ち元禄七年までの両者の交渉については詳かでないが、芭蕉最後の旅には、惟然、次郎兵衛、又右衛門らと共に、師に同行している。

現存の資料では「葛の松原」刊行に対する芭蕉自身の非難のことばは残されておらず、むしろ芭蕉を納得させるものであったと思われるし、入門から、最後の旅の臨終にのぞんで、支考への厚い信頼を見せているところから、芭蕉と支考は深い信頼関係にあったと思われるのであり、その辺を眺めてゆこうとするのであるが、ここに元禄五年の、五月、九月の一見芭蕉が支考を難じたと思われる書簡が伝わっている。

引用すると次のようなものである。

盤子ハ二月初ニ奥州へ下候。いまだ帰不申候。こいつハ役（ママ）に立やつニ而無御座候。其角を初連衆皆〳〵悪立候へバ無是非候。尤なげぶし何とやらをどりなどて（ママ）、酒さへ呑ば馬鹿尽し候へバ、愚庵気をつめ候事難成候。定而帰候ハヾ上り可申、其元へ尋候も御覚悟ニ可被成と存候故、内語如此御座候。